

第15章 主要産業の動向

I. ブラジルの産業動向～概要

ブラジルは 1920 年代まで、農業分野では欧米諸国向けに嗜好品である砂糖、コーヒー、カカオやゴムなどの熱帯・亜熱帯作物の生産と輸出によって経済発展を行なってきた。また鉱業分野では、鉄鉱石の採掘と輸出による経済発展が行われた。欧米諸国は、一次産品の生産拠点であるブラジルに対し、港湾や鉄道などのインフラ面での投資を行い、これが現在のブラジルの経済インフラの基礎となっている。

1929 年に発生した世界恐慌により、欧米諸国の景気が悪化し、コーヒー等の嗜好品に対する消費市場が急速に冷え込んだ。これにより、欧米への嗜好品の輸出によって経済が成り立っていたブラジルの経済は大打撃を受けた。このような経済の脆弱性への反省から経済の構造的な変革を目指し、自国内の工業化を目指す動きへと、ブラジル経済は歩みをはじめた。

ブラジルでは、工業分野においては多くの国におけるのと同様、輸入代替工業化による国内工業の育成が目指された。しかし、ブラジルにおける輸入代替工業化は、すでに先進国との技術格差が大きく、短期間で輸入代替による産業育成を図ることは困難であったこと等が原因となり失敗に終わった。その後、自国に技術の無い自動車産業などから市場の開放を行い、現在は一部の規制業種を除き、ブラジルの市場は海外に開放されている。

現在のブラジルの一次産品は、他国への供給と、自国内の消費のふたつの方向からの牽引力が働き、市場が拡大している。他国への供給の面では、中国をはじめとする新興国の経済発展に伴う一次産品に対する需要の増加に対応する一次産品の生産地として一次産品の市場を牽引している。また、自国内においても、中産階級以下の国民の所得の向上に伴い生じた消費市場の拡大が、一次産品の市場を牽引している。

ブラジルの工業分野においては、市場の開放による外資の参入機会が大きいという市場の魅力と、インフレ抑制に成功したことでブラジル経済が安定したこと、中産階級の台頭によって拡大した市場の魅力の二つがポイントとなる。

II. 農業・畜産業およびその加工産業

II-1. 概要

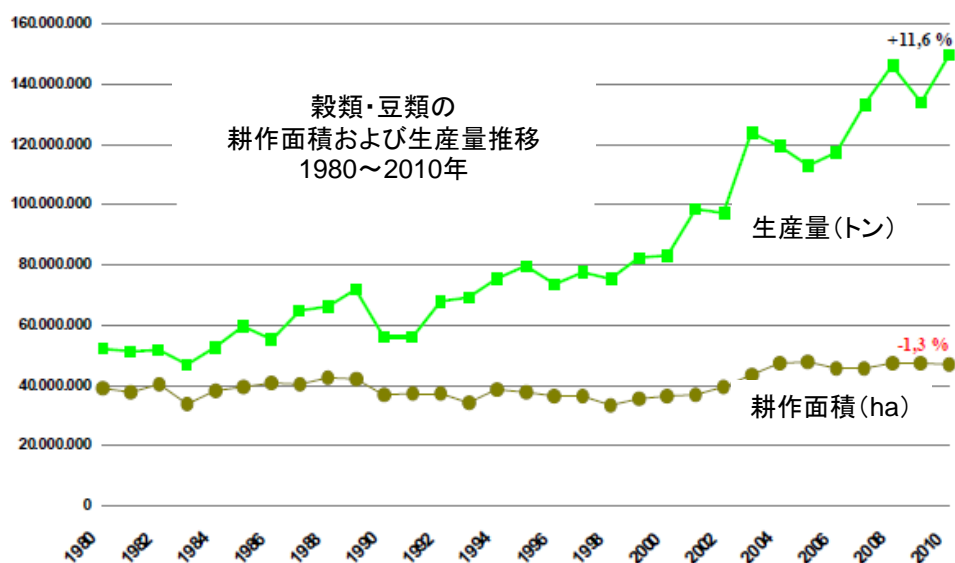
1930 年代以降にブラジル国内の工業化が進み、南東部を中心とした都市化が進むと、ブラジル国内の市場が発生し、都市周辺には国内市場向の農業生産基盤が確立した。1970 年代から、ブラジルではセラード地帯などこれまで耕地として適さないとされてきた土地での開発に着手した。セラード地帯では大豆などの生産が行われ、現在では世界有数の穀物地帯となっている。

ブラジル固有のアグロインダストリーの魅力は、以下の三点にまとめられる。一つは、セラードを中心とする未開拓の土地がまだ残されていて、かつ水資源も豊富にあることで

ある。次に、既存の開拓地においても肥料などの改良により耕地当たり収穫量の効率が上がると見込まれていることである。この二点は、サトウキビやコーヒーの生産においても当てはまる。これに加えて、大豆生産にとっては、南半球に存在し、米国と収穫時期がずれるため、穀物市場への安定的供給を行う上で魅力的な土地である事もあげられる。

ブラジルのアグリンダストリーの拡大において制約となりうる点は、次の二つといわれている。一つは、ブラジルの耕地拡大が、アマゾン地帯やセラード地帯の開拓によることであり、耕地拡大による環境破壊が懸念されていることである。近年、ブラジルでは政府も含め、環境を保護する姿勢が強まっていることから、今後、アマゾン地帯やセラード地帯の開発に規制がかかり、耕地の拡大に歯止めがかかる可能性がある。加えて、拡大耕地からの収穫物は、コスト上昇の問題も抱えている。これは、耕地の拡大は未開の内陸部の開発となっていくことから、今後の開拓耕地付近には、道路などのインフラが整備されていない場合が多く搬送コストが高くなるためである。

図表 15-1 ブラジルの穀物、豆類、オイルシードの
生産量（緑）と耕作地面積（ベージュ）の推移



(出所：IBGE)

ひとくちメモ ⑧：農作物輸送で利用されているインフラ

現在、農業生産地である中西部からの輸出は、サントス港など南部の港からの輸出量が多い。ブラジルの農業が抱える課題の一つが、生産地である内陸部からの輸出港までの移動に伴う輸送のコスト高である。生産地付近では道路の舗装整備が進んでいないために、全般的な搬送コストが高くなってしまい、ブラジル農産物の国際競争力を低下させていた。この課題克服の為、ブラジル政府は各道路の整備改善を計画しており、以下がその主な対象である。

図表 15-2 今後予定されているブラジルの農産物搬出回廊の整備計画

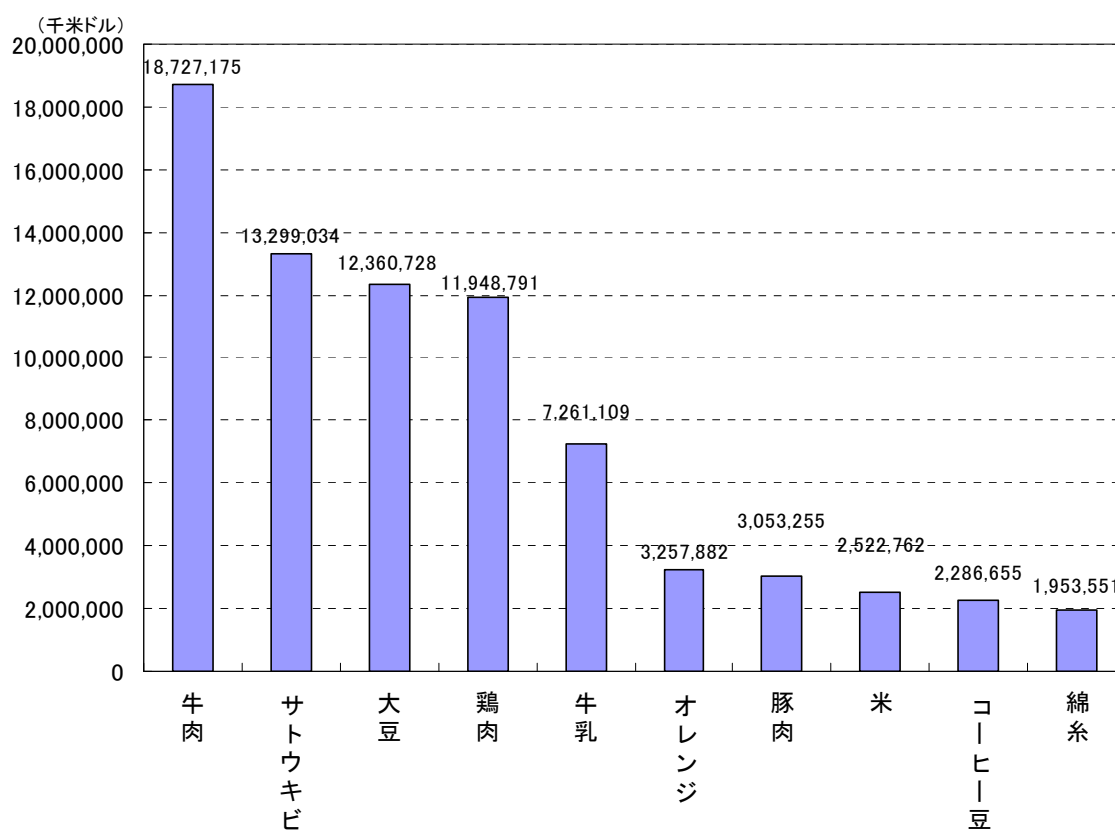
名称	対象部分
クアバーサンタレン街道 (国道163号線)	クヤバ (MT) から北上、ソリーゾ市 (MT) を経てアマゾン本流のサンタレン港までをつなぐ
ベレンーブラジリア街道 (国道153号線)	マットグロッソ州のゴヤス州との境界、バーラ・デ・ガルサから同州東部を北上、アラグアイナ (TO) からマラニオン州を経てパラ州に入り、ベレンまでをつなぐ
リベイロン・カスカレイロ街道 (国道242号)	クアバーサンタレン街道および、ベレンーブラジリア街道をつなぐ
カラジャス鉄道	トカンチンス州都のパルマスからマラニオン州のアサイランヂアを通り、マラニオン州都のサンルイスまでをつなぐ
中西ブラジル線	Rondônia州から、マットグロッソ州を横断し、ゴヤス州北部へとつなぐ
テレス・ピーレス河	パラ州西部を流れるタパジヨス河上流のテレス・ピーレス河を利用してつなぐ

(出所：サンパウロ新聞)

II-2. 主要作物概要

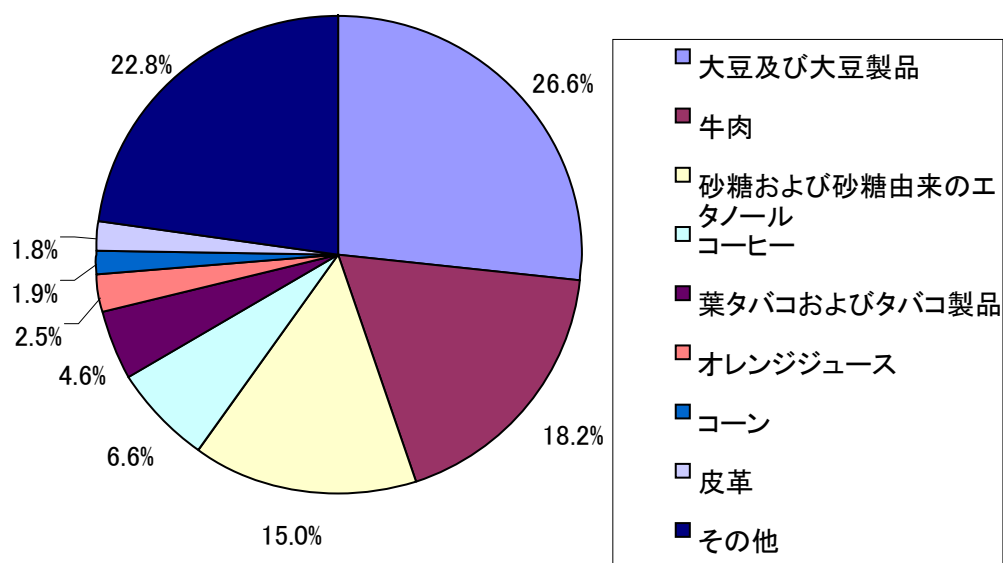
ブラジルの農業では、サトウキビ、大豆の生産高が世界有数であるほか、コーヒー豆の生産および輸出、オレンジジュースの輸出量においては世界一を誇る。

図表 15-3 2008年の農作物の種類別生産額



(出所：FAOSTAT)

図表 15-4 ブラジルの農畜産関係の輸出品目割合（金額ベース）



(出所：FAOSTAT)

図表 15-5 ブラジルで生産されている主な農産物とその概要

品目	概要
サトウキビ	<ul style="list-style-type: none"> ・ サトウキビは、砂糖の原料となるほか、バイオ燃料としても利用されている ・ サンパウロ州で全体の約 60%を生産するほか、パラナ州、ミナスジェライス州、ゴイアス州でも生産が盛んである ・ 新興国の食生活の変化に伴い、世界的に砂糖の消費量が増大している ・ CO2 削減のための代替エネルギーの導入で、バイオエタノールの需要が世界的に拡大し、その原料の一つであるサトウキビの需要も伸びている
大豆	<ul style="list-style-type: none"> ・ 大豆は、食用として利用されるほか、搾油した後の大豆粕は牛や鶏の飼料としても利用されている ・ ブラジル南部や、中西部以北のセラードと呼ばれる地帯での生産が行なわれている ・ 生産量・輸出量ともに米国に次ぐ世界第 2 位の生産量である ・ 新興国を中心とする、世界的な大豆需要の拡大に対し、大豆作付けの耕地面積が拡大できる土地は限られている。ブラジルではセラード地域での耕地の拡大により、今後も大豆生産の拡大できる世界でも数少ない国である

オレンジ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 主にオレンジジュースへの加工用として栽培されている。 ・ 主な産地はサンパウロ州である、同州のみでブラジル国内の 9 割以上のオレンジを産出する。
コーヒー	<ul style="list-style-type: none"> ・ ブラジルは世界最大のコーヒー豆の生産・輸出国である ・ ミナスジェライス州および、サンパウロ州での生産が盛んである

(出所：MAPA その他資料)

図表 15-6 ブラジルで生産されている主な畜産物とその概要

品目	概要
牛肉	<ul style="list-style-type: none"> ・ 米国に次いで世界第 2 位の牛肉生産国である。 ・ マットグロッソ州やサンパウロ州が主な産地である。
鶏肉	<ul style="list-style-type: none"> ・ アメリカ及び中国に次ぐ生産量を誇る。 ・ アジアで鶏インフルエンザが問題になって以来、日本向けの輸出も多い。 ・ 南部地域での生産が盛んである。

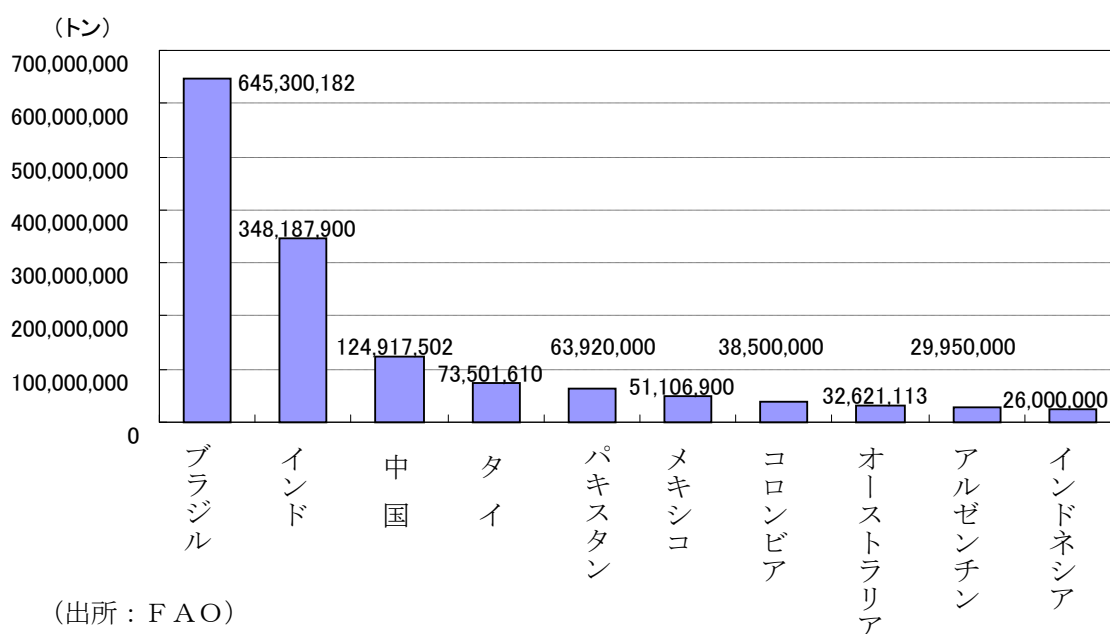
(出所：MAPA その他資料)

① サトウキビ

ブラジルは、世界第一位のサトウキビの生産国である。

サトウキビは、砂糖の原料となるほか、バイオ燃料としても多く利用されている。サンパウロ州で全体の約 60%が生産され、パラナ州、ミナスジェライス州、ゴイアス州でも生産が盛んである。

図表 15-7 サトウキビの主要生産国における生産量（2008年）



(砂糖としての利用)

サトウキビは、植民地時代から、ブラジルの代表的な一次産品である砂糖の原料として重要な地位を占めてきた。サトウキビの生産から砂糖への加工まで、ブラジル国内で行われている。

砂糖は中国など新興国における食生活の変化から、世界的に消費が増大しており、砂糖の需要は拡大している。ブラジルは、生産に対する消費の割合がその他生産国と比較して少ないため、砂糖は国内向けよりも輸出向けが多い。

2009年の砂糖輸出額は84億ドル、輸出量は2,429万トンであった。

(エタノールとしての利用)

ブラジルでは、1975年に国家エタノール計画が開始された。この計画に基づき、ブラジル国内でのサトウキビ由来のエタノール利用の拡大が政策的に進められた。ブラジル国内でのエタノール利用は、自動車燃料としての利用と、発電燃料としての利用が主な利用方法である。ブラジルでは、エタノールとガソリンのどちらも燃料とすることができ、かつどのような混合比率でも走行が行なえるフレックス車が市場に広く浸透している。

フレックス燃料車向けのエタノールの需要は、ガソリンとエタノールの価格比較により決定される。エタノールの供給元であるエタノールメーカーは、サトウキビからエタノールを製造すると並行して、サトウキビから砂糖を製造する事が多い。そのため、サトウキビからエタノールを製造するか、砂糖を製造するかは、エタノールと砂糖の価格比較により決定される。ブラジルで製造される砂糖の多くは輸出向けであるため、砂糖の価格は砂

糖の国際価格を基準として決定されている。このように、サトウキビ由来のエタノールの供給量と価格はいくつかの要素が絡んだ複雑な構造で決定されている。このような国内のエタノール生産の需要にあわせ、サトウキビの生産が大幅に拡大している。

ブラジルのエタノールは国内向けだけでなく、輸出向けにも製造されている。近年、CO2削減のための代替エネルギーの導入で、バイオエタノールの需要が世界的に拡大している。バイオエタノールとなる作物は、サトウキビ以外にもとうもろこしや大豆などがあり、生産国によって、その主原料となる作物が異なる。サトウキビ由来のエタノールは、作付面積あたりのエタノールの製造量が多いこと、エタノール製造のためのエネルギー投下に対し、エネルギー効率が優れていること、ブラジルのサトウキビ生産の原材料コストが他国と比較しても競争優位にあることから、今後もブラジルのサトウキビ由来のエタノールは国際競争における競争優位が予想される。

② 大豆

現在ブラジルは、米国に次ぐ世界第2位の大豆生産国である。

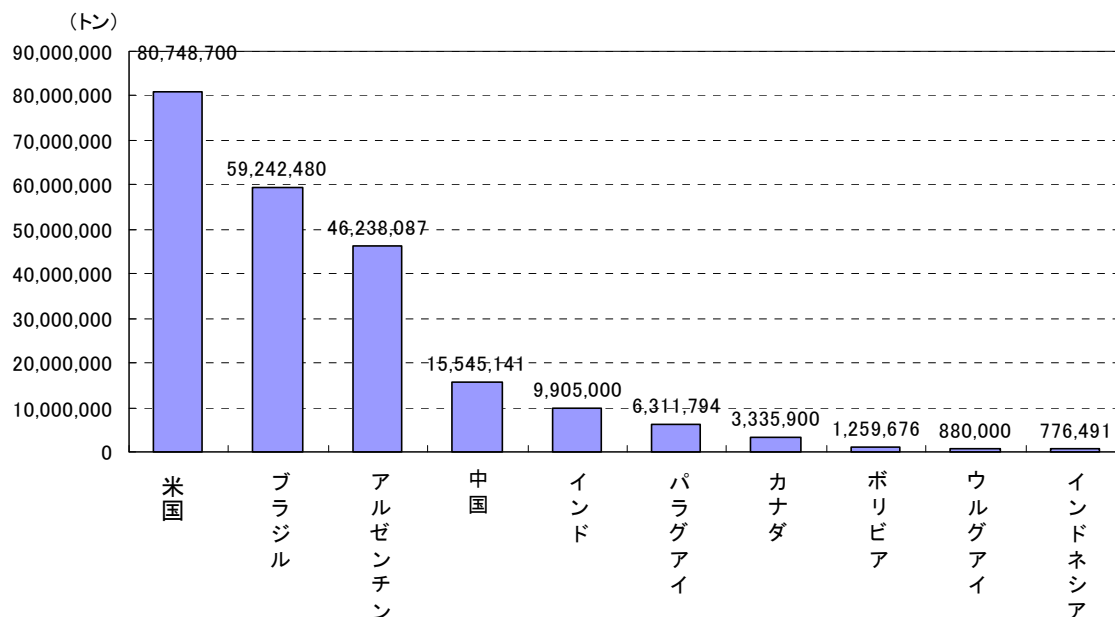
大豆は、古くは南部での生産が盛んであったが、現在はマットグロッソ州やゴイアス州などに広がるセラードと呼ばれる地帯での生産が盛んとなっている。

大豆は、食用として利用されるほか採油用としても広く用いられており、搾油した後の大豆粕は牛や鶏の飼料として利用されている。ブラジルでは牧畜も盛んであるが、大豆粕は鶏や牛の安価で安定的な飼料として、ブラジルの畜産物の国際競争力を後押ししている。

大豆産業は、国内外の需要拡大を背景に、穀物メジャー、食品多国籍企業、民族系食品大企業の参入を経て、生産高が飛躍的に拡大している。

新興国を中心とする、世界的な大豆需要の拡大に対し、大豆作付けの耕地面積が拡大できる土地は限られている。ブラジルはセラード地域での耕地の拡大により、今後も大豆生産の拡大できる世界でも数少ない国である。そのため、ブラジルにおける大豆生産は今後増加が予想される。

図表 15-8 大豆の主要生産国における生産量（2008年）



（出所：FAO）

③ オレンジ

ブラジルは世界最大のオレンジジュースの輸出国である。

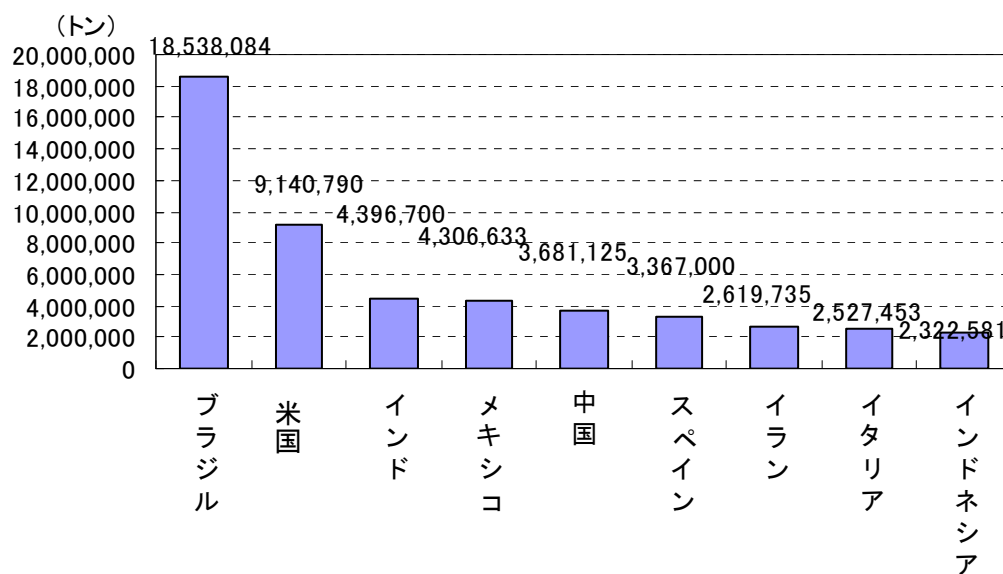
1960年に、米国のフロリダ州を寒波が襲い、同州のオレンジ生産が打撃を受けた。同州の柑橘系関係者が安定的なオレンジ生産の調査を開始し、オレンジの生産地としてサンパウロを選んだ。同州が選ばれたのは、フロリダ州で生産されていたオレンジとサンパウロ州で生産されていたオレンジの品種が似ていたこと、サンパウロでは寒波の心配がないことが理由となった。

オレンジジュースの輸出額は90年に15億ドルに達し、コーヒーの輸出額を抜いたが、その後、国際市場での供給過剰から輸出額は減少に転じた。

主な輸出先は、EU、米国、カナダである。

オレンジジュースは冷凍して搬送されるが、冷凍後の解凍処理などに手間がかかることが難点だった。ブラジルのオレンジジュース生産大手企業は、遠隔地にある輸出先国に貯蔵物流拠点をおき、そこで解凍処理を行なってから、得意先に配送をおこなう物流システムを確立した。このことも、ブラジルがオレンジジュースの輸出市場でシェアを拡大した理由の一つとなっている。

図表 15-9 オレンジの主要生産国における生産量（2008年）



（出所：FAO）

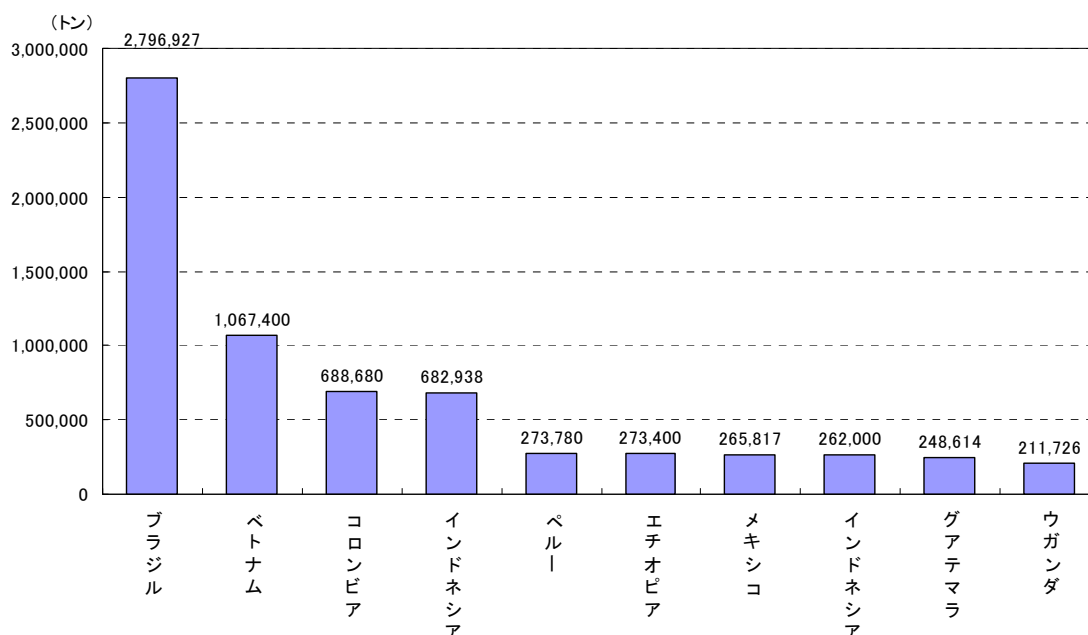
④ コーヒー

ブラジルは世界最大のコーヒー豆の生産・輸出国である。ミナスジェライス州および、サンパウロ州での生産が盛んである。

ブラジルでは、国内におけるコーヒーの飲料としての消費も多い。国内消費に関する統計によると、15歳以上の人口のうち10人に9人が、一日に一杯以上のコーヒーを飲んでいることになる。

ブラジルのコーヒー価格の価格決定は、かつてはブラジル・コーヒー院（IBC: Instituto Brasileiro do Café）が設置され、価格維持による生産拡大と輸出振興が図られていたが、現在は廃止されている。現在、コーヒーの価格は国際コーヒー機関（ICO）が、生産国ごとの輸出量を調整して決定している。ブラジル産のコーヒー豆の輸出も多いが、ブラジルの総輸出額に占めるコーヒー豆の輸出額のシェアは低下している。

図表 15-10 コーヒー豆の主要生産国における生産量（2008年）



（出所：FAO）

ひとくちメモ⑨：ブラジルが鍵を握る全世界のコーヒー市場¹⁶

世界におけるコーヒー豆最大の生産国はブラジルであり、全世界の約3割を占めている。従ってブラジルにおける豊凶は、コーヒーの国際的な需給に大きな影響を与える。

米国農務省の発表によると、2009～2010年度（2009年10月1日～2010年9月30日）の世界のアラビカ種の生産量は、前年度の8,338万袋から7,515万袋へと約1割減少するものと見込まれている。この背景として、世界最大の生産国ブラジルにおける生産サイクル上の不作年に当たることが挙げられる。同国におけるアラビカ種の生産は前年度の4,050万袋から3,300万袋へと約19%も減産すると見込まれている。

このような大幅な生産量の減少にもかかわらず、2009～2010年度におけるブラジルのコーヒー輸出量は2,600万袋に達している。これは前年度の2,839万6,000袋を約8.5%のみ下回る水準である。米国農務省の報告によれば、ブラジルは国内の在庫を取り崩すことにより、一定の輸出分が確保した模様だ。

2010～2011年度は一転して、ブラジルにおけるコーヒー豆生産の見通しは明るい。生産サイクルから上の豊作期に当たることに加え、昨今のコーヒー価格の上昇が生産者の生産意欲を高めているため、同年度のブラジルの生産量は大幅に回復すると予想されている。

¹⁶ 財務省『通関統計』（<http://coffee.ajca.or.jp/data/pdf/2010-03.pdf>）、ALTER TRADE JAPAN WEBSITE（http://www.altertrade.co.jp/02/cof/cof_05.html）日本先物情報ネットワーク（<http://www.ndl.go.jp/brasil/column/coffee.html>）、サーチナ：2010年7月1日付記事（http://news.searchina.ne.jp/disp.cgi?v=2010&d=0701&f=business_0701_080.shtml）を基に、(株)日本総合研究所が編集

米国農務省によると、ブラジルにおける 2010～2011 年度のアラビカ種の生産量は 4,180 万袋と過去最大に達する見通しである。

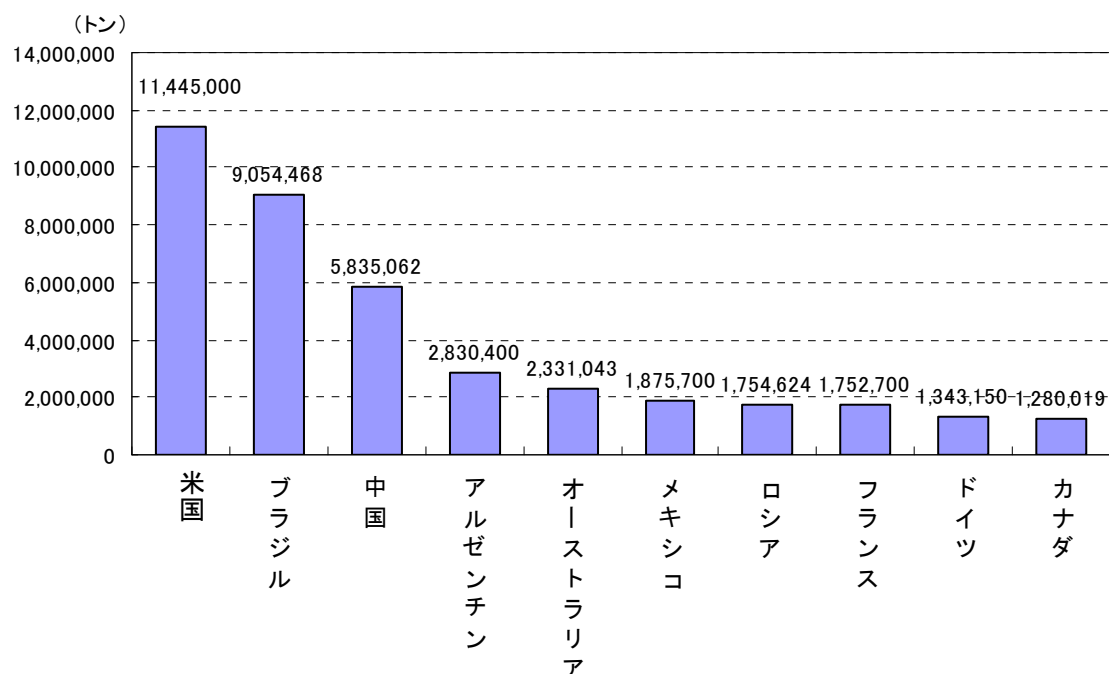
この増産により、ブラジル国内のコーヒー在庫量は 734 万 6,000 袋に回復すると予想されている。これは、同国の需給が逼迫しているかどうかを判断する際の目安となる 500 万袋を上回る水準である。

このように、ブラジルが「世界のコーヒー市場のリーダー」であるといえる一方、日本におけるブラジル産コーヒーの重要性も近年急速に高まっている。ブラジルからのレギュラーコーヒー輸入量は、2000 年には 130 千 kg（全輸入量の 4.7%）に過ぎなかったが、2009 年には 990 千 kg となり、全輸入量の 16.4%を占めるまでになった。

⑤ 牛肉

ブラジルの牛肉生産量は米国に次いで多い。ブラジル料理としてシュラスコが思い浮かべられるとおり、ブラジル人は牛肉を多く消費する。そのためブラジルは、からの牛肉の輸出量は、世界の貿易量に比較するとあまり多くない。また、トレーサビリティ確保の問題から、EU は 2008 年からブラジル産牛肉輸入を一部の農場からに限る政策を取っている。2011 年 1 月現在、ブラジルがこの EU の政策に対して WTO に提訴を検討していると報じられており、今後の動向にも注目が集まる。

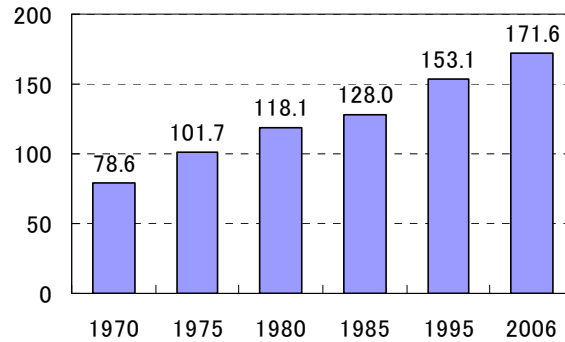
図表 15-11 牛肉の主要生産国における生産量（2008 年）



(出所：FAO)

図表 15-12 ブラジルにおける肉牛の飼育頭数の推移

(百万頭)



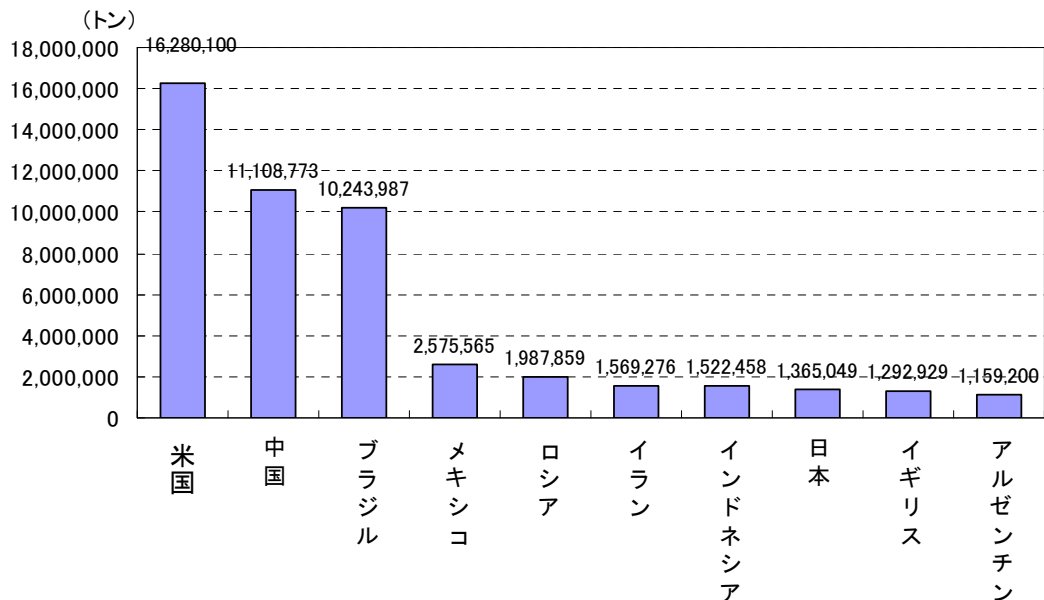
(出所：IBGE)

⑥ 鶏肉

ブラジルは現在世界第3位の鶏肉生産国である。また輸出量においても、世界最大の輸出国であるアメリカと並ぶ規模であり、世界の貿易量の約7割をこの2国で占めている。

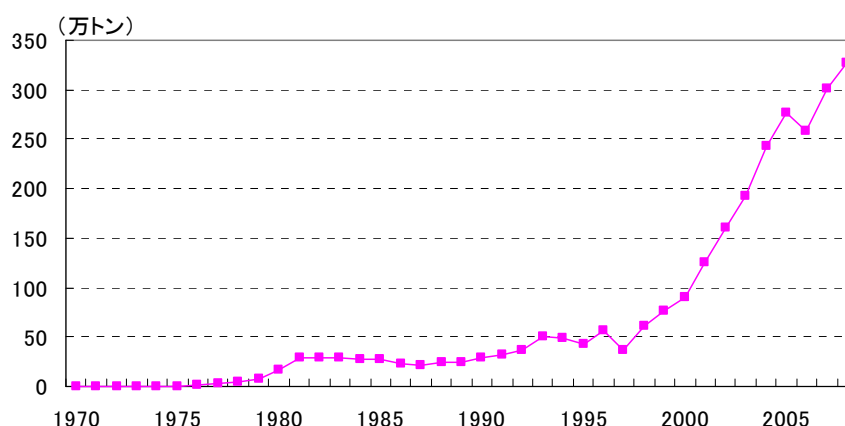
もともと、ブラジルは元来、主要な鶏肉輸出国ではなかった。1970年代から輸出が本格化し、その後1990年代後半以降アジアのトリインフルエンザが問題になって以降、ブラジルが主要な輸出国として台頭してきた。

図表 15-13 鶏肉の主要生産国における生産量 (2008年)



(出所：FAO)

図表 15-14 ブラジルの鶏肉の輸出量の推移



(出所：FAO)

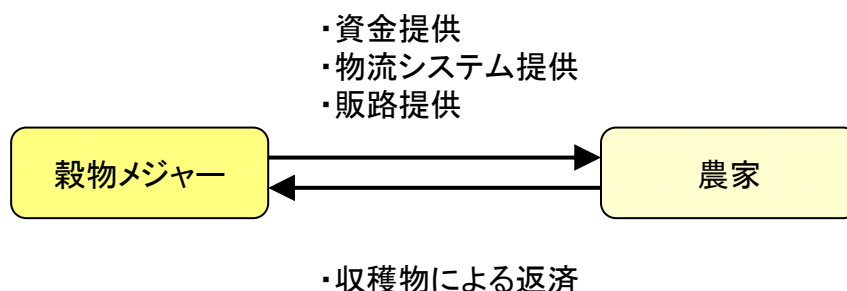
II-3. 市場のプレイヤー概況

① ブラジル資本の企業および外資企業

大豆を中心とする穀物市場においては、穀物メジャーとよばれる企業がブラジル市場において主要なプレイヤーとなっている。穀物メジャーは、早くは1900年代初頭からブラジル市場に進出していたが、ブラジル市場においては長い間、地場企業と並存してきた。1990年代に入り、穀物メジャー各社は穀物市場の国際的な囲い込み戦略の中で、ブラジル国内の競合企業の合併・吸収に乗り出し、現在では穀物の生産を除く、調達から搾油といった製造部分から販売までの生産・流通を担って利益を生んでいる。

穀物メジャーは、穀物の生産の部分に対しても、農家の囲い込みという形で支配を行っている。典型的な例は、ブラジルの農家に対して、土壌改良のための石灰や肥料、および種の購入に必要な資金の貸付を行ない、農家は穀物メジャーによる資金提供に対し、収穫物で返済を行うという仕組みである。これにより、穀物メジャーは安定的な穀物の供給を確保している。穀物メジャーは他にも、収穫物の一時保管倉庫や物流システムを農家に対して提供するほか、世界市場へ収穫物の輸出を行うことで、安定的な販路も確保することで農家との関係を築き穀物の生産を支配している。

図表 15-15 穀物メジャーと農家の関係概念図



図表 15-16 ブラジルで活躍する穀物メジャー4社の概要

企業名	概要
ブンゲ	<ul style="list-style-type: none"> ・ オランダ系の穀物メジャー ・ 1900年代初頭にブラジル市場に進出 ・ 大豆搾油企業セヴァル社を買収
ルイス・ドレイフェス	<ul style="list-style-type: none"> ・ フランス系の穀物メジャー ・ 1900年代初頭にブラジル市場に進出 ・ アンダーソン・クレイトン社を買収
カーギル	<ul style="list-style-type: none"> ・ 米国系の穀物メジャー ・ 1960年代にブラジル市場に進出
ADM	<ul style="list-style-type: none"> ・ 米国系の穀物メジャー ・ ブラジル市場の進出は後発組 ・ サディア社の大豆部門を買収

(出所：現代ブラジル辞典他資料より(株)日本総合研究所作成)

図表 15-17 ブラジルで活躍する食肉メジャーの概要

企業名	概要
JBS	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1953年にゴイアス州で設立 ・ 牛肉、豚肉、鶏肉の加工および肉類の冷凍食品を中心に製造を行う多国籍企業 ・ 牛肉加工分野では、米国のスウィフト・アンド・カンパニー (Swift & Company) など、各国企業の積極的な買収を行い、現在は世界最大の規模
ブラジルフード	<ul style="list-style-type: none"> ・ サディア社とペルディガン社の合併により 2009年に成立した。 ・ 現在、JBSに次いでブラジル第2位食品会社。

(出所：現代ブラジル辞典、各社HP等より(株)日本総合研究所作成)

図表 15-18 ブラジルで活躍する砂糖およびサトウキビ由来のエタノールメーカーの概要

企業名	概要
コーザン	<ul style="list-style-type: none"> ・ サトウキビの栽培に始まり、砂糖およびエタノールの製造に携わり、製品のロジスティック面も自社で行う。 ・ 世界第3位の砂糖製造企業。 ・ 工場をサンパウロ州、ゴイアス州、マツグロソ・ド・

	<p>スル州に保有。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 2008 年度には 2.7 百万トンの砂糖を輸出。 ・ エタノール生産においては世界 5 位であり、17 億リットルのエタノールを製造（うち、415.5 百万リットルは輸出）。 ・ エッソのブラジル会社の株式を取得し、エッソ社およびモービル社のブランド使用を含めたブラジルにおけるガソリンスタンド事業を継承した。（ブラジルのガソリンスタンドでは、サトウキビ由来のエタノール燃料も販売している）。
--	--

（出所：同社 HP より(株)日本総合研究所作成）

図表 15-19 ブラジルで活躍する飲料会社の概要

企業名	概要
アメリカ飲料会社	<ul style="list-style-type: none"> ・ 一般に、アンベブ（AmBev）の略称で知られる。 ・ 世界的なビール会社であるアンホイザー・ブッシュ・インベブ社（ベルギー）の系列で、ラテンアメリカ最大のビールメーカー。 ・ ブラーマ、ボエミア、スコール、ステラ・アルトアなど、ブラジルでメジャーなビールブランドを有している。

（出所：同社 HP その他資料より(株)日本総合研究所作成）

② 日系企業の状況

ブラジルにおける日本の農業・食料分野での活動として、1979 年からのセラード開発が挙げられる。ODA の枠組みで日本政府もこのプロジェクトに参画しており、これによって大豆を主な生産物としてセラード地域の農業開発が進んだ。

日本政府が関わる事業としては、同プロジェクトは 2001 年に終了したものの、現在に至るまでブラジルは日本にとって農産資源や食料の主要な調達先となっている。

図表 15-20 農業関係の総合商社の最近の動き

企業名	概要
三菱商事	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2007 年にブラジルのサトウキビ由来のエタノール製造会社への出資及び発酵エタノールの 30 年契約を締結
三井物産	<ul style="list-style-type: none"> ・ エタノールの生産販売に向けて、ペトロプラス社との連携 ・ ブラジル市場で大豆を中心とした穀物の集荷・輸出を手がける農業事業会社である Multigrain S.A.の親会社であるスイス企業 Multigrain AG

	<p>の株式を取得</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ コーヒー輸出会社 Mitsui Alimentos Ltda.を保有
伊藤忠商事	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2008 年にブンゲ社によるサトウキビ由来のバイオエタノール及び砂糖の生産・販売プロジェクトに 20%出資して事業に参画
丸紅	<ul style="list-style-type: none"> ・ インスタントコーヒー製造・販売会社 IGUAÇU 社を生産拠点として、日本向けのみならず欧米やアジアなど世界へ向けた販売体制を確立 ・ ブラジルとアルゼンチンにおいて独立系大手の穀物トレーディングハウスである AMAGGI 社、MOLINOCAÑUELAS 社との包括提携

(出所：各社 HP より(株)日本総合研究所作成)

II-4. 関連産業の状況

ブラジルは世界有数の農業大国であり、関連する産業も大きな市場規模を有する。

農業機械においては、国内生産も一定の規模で行われており、たとえば 2010 年であればトラクターが約 68,000 台、コンバインが約 4,500 台生産されている。Massey Ferguson (AGCO)、New Holland CNH、Valtra などが主要な企業である。

農薬の分野では海外の化学企業のプレゼンスが高い。モンサント、デュポン、BASF、バイエル等の多国籍メーカーはいずれもブラジル国内で操業している。多くの企業は原剤を輸入し、ブラジル国内で最終製品に仕上げ販売する、という事業形態を取っている。なお特定の薬剤に耐性のある遺伝子組み換え作物もブラジルでは既に一部で導入されている。

肥料の分野においては、今後世界的に肥料およびその原料となるりん鉱の需給が逼迫すると見込まれる中、ブラジル政府は肥料の完全自給を目指している。ヴァーレ社が肥料事業を拡大しているのはその流れに沿ったものであり、ブンゲ社からの肥料事業の買収が話題となったほか、ペルーやアルゼンチンでのりん鉱権益の拡大も進めている。

III. 鉄・非鉄金属

III-1. 概要

ブラジルでは、地下資源を含む鉱物資源はブラジル連邦共和国の財産であると憲法に規定されている。そして、鉱床、鉱山、その他の鉱物資源及び金属精錬に関する立法は連邦が立法の権限を有する（ブラジル連邦共和国憲法 20 条、22 条）。

ブラジルでは、ミナスジェライス州とパラ州のカラジャス山脈一帯に鉱物資源が集中している。ブラジルの鉄鉱石は世界有数の高品位鉱であり、かつ採掘地から輸出までに使用するインフラ施設が整っているため、世界の鉄鉱石の輸出基地となっている。1970 年代まではもっぱら近距離の欧州向輸出を行っていたが、港湾インフラの拡張に伴い大型船の受入れが可能となって日本向けを中心とする遠隔地への輸出が増大した。近年は急速な経済発展を遂げている中国向輸出が拡大している。ブラジル国内の中産階級の台頭による

消費市場が拡大に伴い、自動車や一般産業が成長してきたため、製品の素材となる鉄鋼製品の市場としても注目を浴びている。生産技術の成熟を伴って、中間製品の輸出基地としての位置付けから、最終製品の供給基地としてドイツ、中国、韓国、日本など海外鉄鋼メーカーによるブラジルでの製鐵所新設が行なわれている。

また、ブラジルは広大な国土と地質の多様性から、鉄鉱石以外にも多様な鉱物を有する。非鉄金属分野においても、ニオブや錫などを中心として、世界有数の非鉄金属、希少金属資源を産出する国として知られ、ブラジルで生産される鉱物資源は約 80 鉱種に及ぶ。現在の採掘の中心は、ミナスジェライス州やパラ州となっている。ただし、熱帯雨林に覆われこれまで開発が進められなかった北部アマゾン地帯においても、地質学的調査により多数の非鉄金属資源の存在が予想されている。これら非鉄金属資源鉱床の探鉱のため、ヴァーレ社を中心として多数の探鉱プロジェクトが計画されている。

こういった資源開発の計画が進められる一方で、多くの鉱物資源の存在が期待されるアマゾン地帯では、鉱物資源の開発に伴う森林伐採等の環境破壊が問題となっている。近年、世界的な環境保護の影響も受け、国土の大半をアマゾンの熱帯雨林で覆われているブラジルは、環境立国として国際舞台での発言力の向上をねらっているため、鉱物資源の開発は、環境保護の観点から制約を受ける可能性がある。現在のところ、ブラジルはその豊富な資源を国力の原資として経済活動を展開し、発展する基本政策をとっており、鉄・非鉄金属の開発には積極的であるが、今後の動向には注視が必要である。

図表 15-21 世界におけるブラジルの金属資源生産の位置づけ (生産量)

鉄 鉱 (1,000 t)			
国(地域)	2004	2005	2006
ブラジル	279,745	357,130	473,567
中国	145,749	200,329	276,441
オーストラリア	234,697	257,525	275,091
インド	145,942	154,436	165,000
ロシア	97,052	95,099	102,167
ウクライナ a	65,998	69,456	74,037
米国	54,700	54,300	52,700
南アフリカ	39,274	39,542	41,195
カナダ	28,596	30,387	33,543
カザフスタン	18,726	26,901	32,045
スウェーデン	22,272	23,447	23,346
ベネズエラ	20,021	21,179	22,100
イラン	12,746	14,828	14,071
モーリタニア	10,719	10,700	11,127
(日本)	bc 1

白金 (t)			
国(地域)	2004	2005	2006
ブラジル	...	691	1,037
南アフリカ	160
ロシア	36
カナダ	26	23	23
ジンバブエ	4	4	...
米国	4	4	4
コロンビア	1
日本	1

銅 鉱 (1,000 t)			
国(地域)	2004	2005	2006
チリ	5,419	5,330	5,385
インドネシア	840	4,618	3,756
トルコ	2,356	1,860	...
米国	1,160	1,140	1,200
ペルー	813	790	1,049
アルジェリア	d 963
オーストラリア	800
イラン	190	549	784
ロシア	675
中国	620
カナダ	545	577	586
ブラジル	...	466	498
ブルガリア	1,012	376	458
ザンビア	427
(日本)	1

ボーキサイト (1,000 t)			
国(地域)	2004	2005	2006
オーストラリア	56,316
ブラジル	23,300	26,632	26,720
ギニア	16,000
中国	15,000
ジャマイカ	13,351	14,117	14,851
インド	11,964	12,335	...
ロシア	6,000
ベネズエラ	5,500	5,815	5,815
スリナム	4,217	5,022	4,945
カザフスタン	4,705	4,815	4,884
インドネシア	1,331	2,550	4,368
アメリカ合衆国	2,516	2,481	...
ギニアビサウ	g 2,467
ギリシャ	2,444
ガイアナ	1,479	1,676	1,474

ニッケル鉱 (t)			
国(地域)	2004	2005	2006
ロシア	315,000
カナダ	177,281	192,855	224,565
オーストラリア	185,000
インドネシア	e 133,000
ニューカレドニア	119,199	111,939	102,986
キューバ f	75,913	75,641	...
コロンビア	75,032
中国	64,000
ドミニカ共和国	47,000
南アフリカ	39,850
フィンランド	44,496	40,897	39,582
ボツワナ	22,292	28,212	26,762
ギリシャ	21,700
ベネズエラ	20,468
ブラジル	41,124	...	7,182

すず 鉱 (t)			
国(地域)	2004	2005	2006
中国	110,000
インドネシア	65,772	78,404	...
ペルー	36,162	36,624	38,500
ボリビア	18,115	18,639	17,400
ブラジル	h 12,217
ナイジェリア	3,000
米国	2,500
シエラレオネ	j 2,065
マレーシア	3,000	3,000	2,000
スペイン	d 2,000
オーストラリア	1,435
ベトナム	415	851	982
ミャンマー	700
ラオス	340
ルワンダ	300

亜鉛 鉱 (1,000 t)			
国(地域)	2004	2005	2006
中国	2,260
オーストラリア	1,355
カザフスタン	1,062	1,097	1,218
ペルー	1,035	1,028	1,202
インド	666	893	...
アイルランド	815
米国	739	748	727
カナダ	734	619	601
メキシコ	426	476	479
スウェーデン	367	391	393
ブラジル	h 330
タイ	199	284	214
ロシア	179
ボリビア	147	160	167
(日本)	48	41	10

クロム 鉱 (1,000 t)			
国(地域)	2004	2005	2006
南アフリカ	h 7,405
インド	3,622	3,423	...
カザフスタン	3,287	3,581	3,366
ブラジル	486	553	943
ジンバブエ	831	731	...
イラン	...	234	268
トルコ	161	254	...
中国	200
オーストラリア	77
インドネシア	73	77	73
パキスタン	29	46	65
フィリピン	42	38	47
マダガスカル	46	39	42
キューバ	40	34	28
スーダン	14

(注) 表中の表記は以下の通り

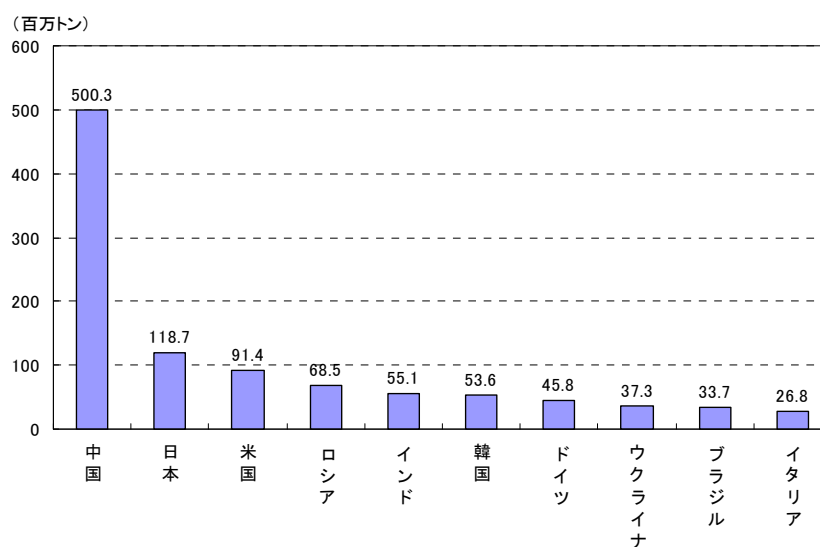
a 塊でない鉄鉱のみ b 2001年 c 砂鉄及び硫化金属鉱物を含む d 1998年 e 精鉱の含有量 f ニッケル鉱とコバルト鉱 g 1997年 h 2003年 j 1999年

(出所：統計局「世界の統計 2010」)

III-2. 主要製品概要

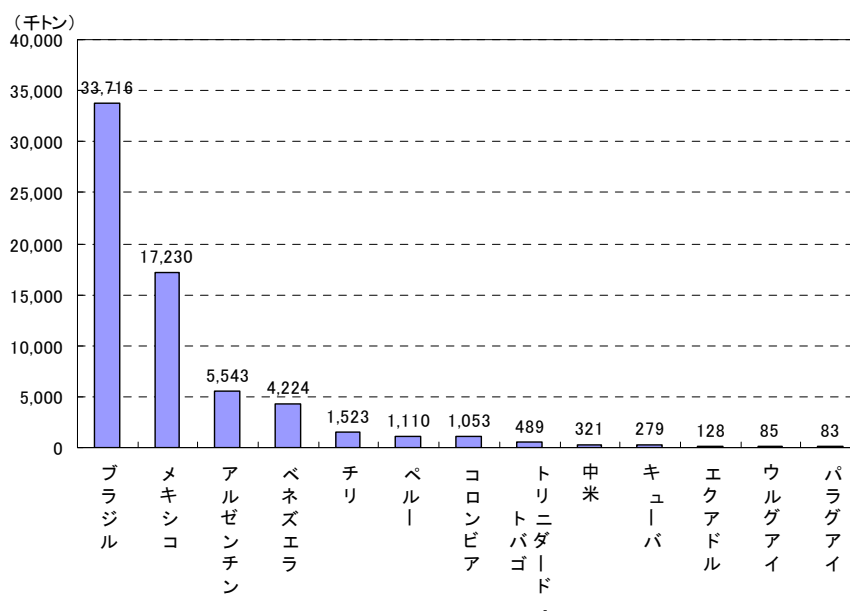
ブラジルの粗鋼生産は約 3300 万トンに及ぶ。世界 9 位に位置し、特にラテンアメリカ諸国の中では主要な生産国であると位置づけられる。

図表 15-22 ブラジル鉄鋼業の位置づけ(世界各国の粗鋼生産量、2008 年)



(出所 : Anuário Estatístico Setor Metalúrgico)

図表 15-23 ブラジル鉄鋼業の位置づけ(ラテンアメリカ諸国の粗鋼生産量、2008 年)



(出所 : Anuário Estatístico Setor Metalúrgico)

ブラジルには2009年時点で、製鉄所数が27存在し、年間生産能力は42.1百万トンである。近年、ブラジル国内の中産階級の台頭によって消費市場が拡大し、ブラジル国内で自動車産業等が発展したため、製品の素材となる鉄鋼製品の市場としても注目されている。

また、ブラジルは地理的に欧米市場にも近く、将来的には経済発展が見込まれているメルコスール各国との経済協定を有することから、同国で採掘された鉄鉱石を同国内で加工し、欧米市場やメルコスール各国への輸出を狙って、ドイツ、中国、韓国、日本など海外鉄鋼メーカーによるブラジルでの製鉄所新設が行なわれている。

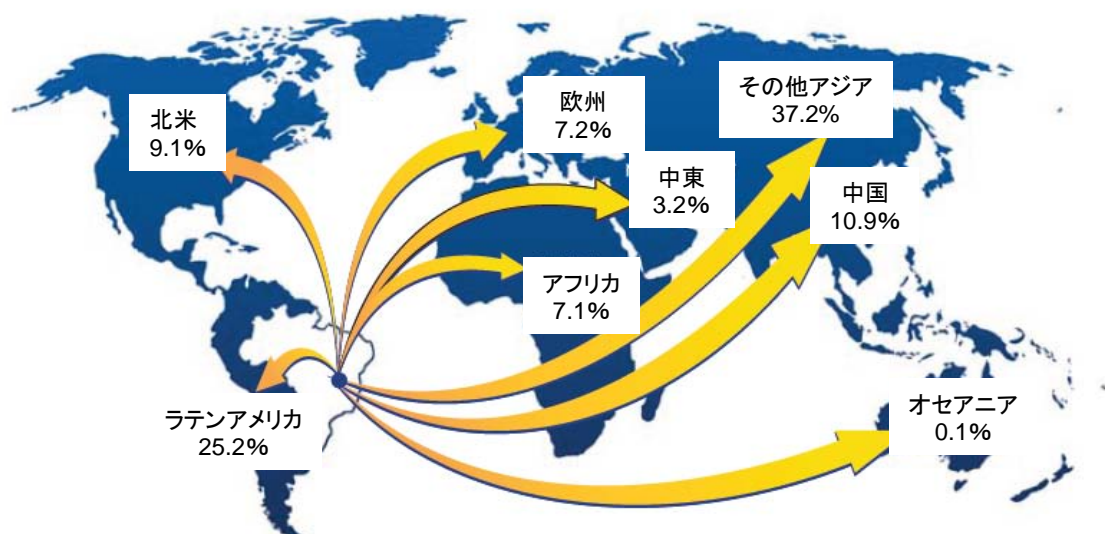
図表 15-24 ブラジル鉄鋼業の状況を示す主な指標

指標	2009年
製鉄所数	27 (一貫高炉12、電炉15)
年間生産能力	42.1百万トン(installed capacity)
粗鋼生産	26.5百万トン (2008年は32百万トン、2009年前半は世界金融危機の影響で減産)
鉄鋼製品生産量	25.7百万トン
推定鉄鋼消費	18.6百万トン
総売上高	19億米ドル
国民一人当たり鉄鋼消費量	97kg

(出所：ブラジル鉄鋼協会(IBS)他資料)

図表 15-25 ブラジルの鉄鋼製品の輸出先 (2009年)

(重量ベース)



(出所：acobrasil)

III-3. 市場のプレイヤー概況

① ブラジル資本の企業および外資企業

<鉄鋼>

ブラジルの鉄鋼業界においては、ヴァーレの占める役割が非常に大きい。ヴァーレは世界を代表する鉱山会社の一つであり、かつては国営企業であったが現在は民営化している。粗鋼生産においては、ブラジル地場企業だけでなく、外資系企業もブラジルで活動している。

ブラジルでは良質の鉄鉱石が採掘されるほか、鉄鋼半製品の製鉄所を有し上流工程を担え、コスト競争力を有すること、欧米の巨大市場に近いという地理的利点がある。そのため、鉄鋼のグローバル企業が多数参入をして、ブラジルを製造および輸送拠点とするグローバル戦略を行なっている。

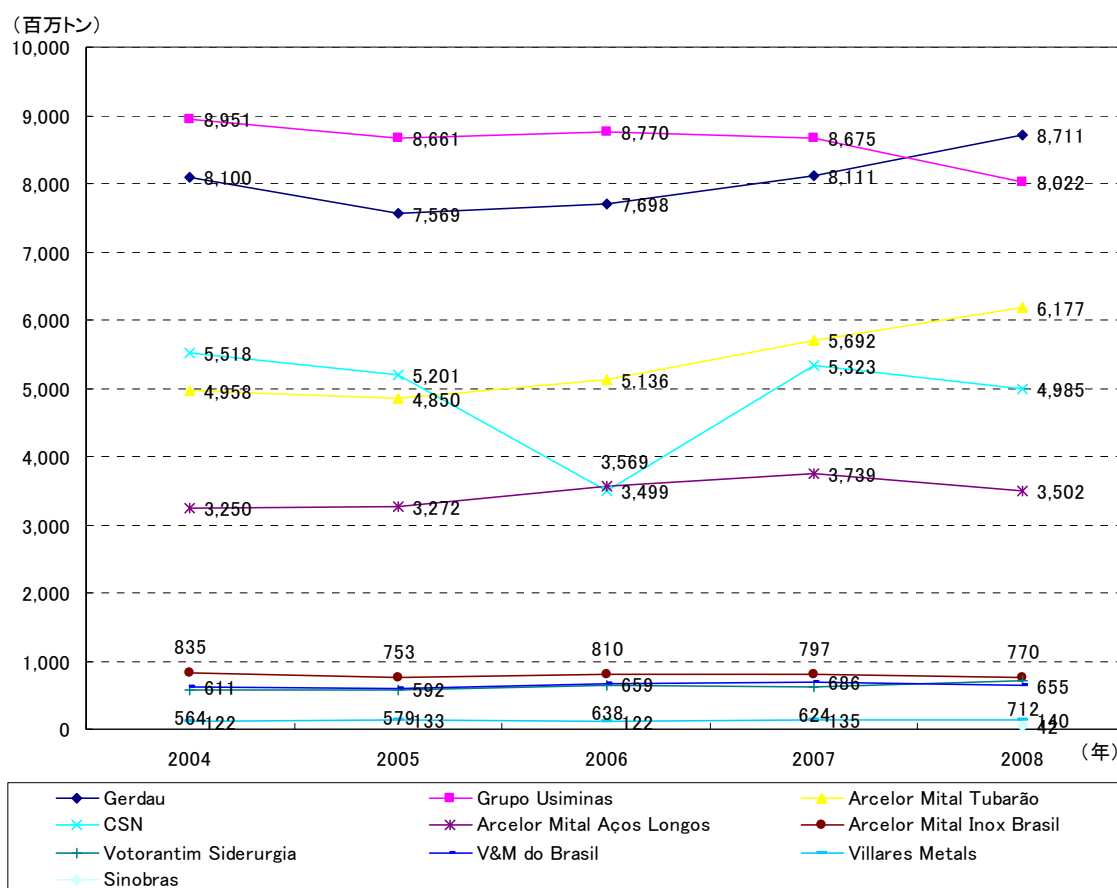
図表 15-26 ブラジル鉄鉱石および鉄鋼業界の主要プレイヤー

企業名	概要
ヴァーレ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1942年に鉄鉱石の輸出を目的とした国営企業として設立され（以前はリオドセ社という社名）、1997年に民営化された。 ・ ミナスジェライス州で採掘した鉱石をヴィトリア港まで鉄道で輸送し輸出していたが、パラ州のカラジャス地域の鉱山開発でマンガン等の鉱物の採掘を開始したことが事業の拡大につながった。 ・ 民営化後、鉄鉱石以外の資源にも事業領域を拡げ、現在は鉄鉱石、石炭、銅、ニッケル、アルミニウム、マンガン、コバルト、PGMといった鉱物を取り扱っている。 ・ 鉱物資源事業に経営資源を集中させ、買収や資本参加を積極的に行っている。 ・ 国内の鉄鋼産業は同社による資本参加も含めるとヴァーレ社の傘下にある。 ・ 鉱山開発に付随したロジスティックス事業も行っている。 ・ 2006年にカナダのインコ社を買収し、国際市場において鉄鉱石だけでなくニッケル・石炭などに関する分野も強化を図っている。 ・ 国内で蓄積したノウハウをいかし、海外の鉱山開発にも積極的に参加をしている。
ゲルタウ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 積極的な海外展開で知られ、企業買収や合併を駆使して生産拠点を拡大し、現在は売上の半分以上がブラジル国外での売上と

	<p>なっている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ブラジル国内では条鋼でのシェアが高い。 ・ 主要ユーザーは自動車部品メーカーや建設請負業者、農業関連会社である。
アルセロールミタル・ブラジル	<ul style="list-style-type: none"> ・ 鉄鋼分野で世界大手のアルセロールミタル社の完全子会社。 ・ ブラジルを拠点として、アルゼンチンなど南米大陸に複数の子会社を有する。

(出所：「資源国ブラジルと日本の対応」、「現代ブラジル辞典」、「資源輸出国と輸入国との経済連携動向調査」より(株)日本総合研究所作成)

図表 15-27 ブラジル鉄鋼業界の主要プレイヤー（企業別粗鋼生産量の推移）



(出所：Anuário Estatístico Setor Metalúrgico)

<非鉄金属>

ブラジルでは、ニオブや錫など多くの非鉄金属が産出されており、ブラジル国内の企業をはじめ、世界から企業が参入をしている。また、アマゾン地帯にはこれまで熱帯雨林に覆われ未開発であった地域での鉱床の存在が多数予想されており、これらの鉱床の探鉱が

進められており、欧米企業が多数の探鉱プロジェクトに参加している。

図表 15-28 ブラジルの代表的なレアメタル関連業界の主要プレイヤー

企業名	概要
ヴァーレ	<ul style="list-style-type: none"> 国内の非鉄金属の生産でも突出している。 非鉄金属の各種探鉱プロジェクトを積極的に推進する。 FERBASA との共同プロジェクトで、ニッケルや銅、コバルト、プラチナ等の金属の探鉱を行なっている。
ボトランチンググループ	<ul style="list-style-type: none"> 2007 年におけるニッケルの生産量は 47,213 t である。ゴイアス州とミナスジェライス州にニッケル鉱山を有する。鉱山は 3 つの子会社 (Cia. Niquel Tocantins, Prometalica Mineracao Centro Oeste S.A., Mineracao Serra de Fortaleza) により操業されている。 その他に鉛や亜鉛の鉱山を所有する。
アングロアメリカン	<ul style="list-style-type: none"> 2007 年における同社のニッケルの生産量はニッケル鉱石 522,599 t、フェロニッケル (FeNi) 29,223 t である。 子会社 (Anglo American Brasil Ltda. と Mineradora Catalão) がゴイアス州にニオブ鉱山を所有する。
ミネラカーオトバコーア	<ul style="list-style-type: none"> 世界でも有数の錫鉱床であるピンチンガ鉱山を管理する。
CBMM	<ul style="list-style-type: none"> ミナスジェライス州に位置する世界でも最大規模のニオブ鉱山である Barreiro 鉱床の開発実施主体である。
ミンサール (ブラジルでは子会社の Serra da Madeira 社)	<ul style="list-style-type: none"> ペルーの非鉄会社であり、ブラジルにピンチンガ鉱山を有する。同鉱山は錫を産出する。
ブレナミネラル	<ul style="list-style-type: none"> カナダの探鉱企業である。ブラジルに、金やダイヤモンドなどの鉱床の鉱区を保有する。タングステン的一种である灰重石の鉱山の権益を有する。
アンガス&ロス (ブラジルでは子会社の St Andrews Minig Ltd.社)	<ul style="list-style-type: none"> ロンドン証券取引所に上場する企業である。タンタル等の鉱物資源の探鉱を目的として複数の探鉱権を保有する。
FERBASA	<ul style="list-style-type: none"> クロムの採掘を行う。 ニッケルや銅、コバルト、プラチナ等の金属の探鉱を、ヴァーレ社と共同で行なっている。

ボンシュセクス	<ul style="list-style-type: none">・ ブラジルの民間資本が元手となる、複数企業の非金融コン グロマリットである。マンガンを産出する Buritirama 鉱 山を有する。
---------	--

(出所: JOGMEC「金属資源レポート第1～3回」2010年をもとに(株)日本総合研究所作成)

② 日系企業の状況

図表 15-29 日本企業の進出状況

企業名	概要
三菱商事	<ul style="list-style-type: none"> 2010 年事業投資先を通じてウジミナス社と鋼材加工サービスセンターを設立
三井物産	<ul style="list-style-type: none"> ヴァーレ社の持株会社である Valepar S.A.発行済み株式の 15%の出資持分を保有（2010 年 3 月時点の議決権比率では 18.2%）
住友商事	<ul style="list-style-type: none"> 住友金属工業および Vallourec S.A.との合弁のシームレスパイプの製造事業に参画 ウジミナス社の子会社であるウジミナスマイニング社へ出資し、鉄鉱山開発事業に参画
伊藤忠商事	<ul style="list-style-type: none"> 日本製鐵メーカー連合（JFE スチール、新日本製鐵、住友金属工業、神戸製鋼所、日新製鋼）と韓国製鋼大手 POSCO 社によるブラジル鉄鉱石生産・販売会社 NAMISA 社への投資
丸紅	<ul style="list-style-type: none"> 高純度フェロシリコンの製造・販売
新日鐵	<ul style="list-style-type: none"> ブラジル第 3 位の鉄鋼大手のウジミナス社が持分法適用会社。 ウジミナス社の主力生産拠点はイパチンガ製鉄所およびクバトン製鉄所である ブラジル国内の販売では自動車および自動車部品の販売量の占める割合が高い

（出所：丸紅提供資料および「資源輸出国と輸入国との経済連携動向調査」より(株)日本総合研究所作成）

III-4. 関連産業の状況

ブラジル国内における鉄鋼製品の需要先は、卸をのぞけば、自動車分野が主力である（2008 年において自動車用 1,607 千トン、自動車部品用 2,384 千トン）。これに続いて、建設分野での需要が多い（2008 年において 3,475 千トン）。

自動車分野は、国内の旺盛な自動車需要と、メルコスール諸国への輸出に対応して順調に市場を拡大しており、今後も成長性を見込める関連産業である。また、土木分野は、政府主導で行なわれている成長促進プログラム（PAC）や低所得社会層向の住宅建設需要に支えられている。2014 年のワールドカップ、2016 年のオリンピックと、国際大会の開催が相次いで予定されており、土木分野の好調な伸びは今後も期待が出来る。

図表 15-30 鉄鋼製品の需要先 (上位5分野)

(1,000 トン)

	2004	2005	2006	2007	2008
卸売り	5,745	4,565	5,621	6,359	6,776
土木工事	2,254	2,156	2,171	2,720	3,475
自動車部品	1,724	1,739	2,001	2,292	2,384
自動車製造	1,291	1,210	1,280	1,552	1,607
リロール	701	618	613	793	786

(出所 : Anuário Estatístico Setor Metalúrgico)

IV. 自動車・輸送機器

IV-1. 概要

ブラジルでは、自動車購買層は長らく高所得者層に限られてきた。そのため、早くから欧米を中心とした外資系メーカーがブラジル市場に展開するも、購買層の拡大が見られず市場は飽和状態となっていた。近年、ブラジルの中間所得者層が消費者として台頭しはじめ、購買層が拡大して市場の拡大につながっている。

また、ブラジル国内で生産された自動車が、メルコスール加盟国へも多く輸出されている。メルコスール加盟各国は中間所得層の出現により、今後の市場が見込まれる地域でもあり、ブラジル進出の際にはメルコスール加盟国への面の展開という視点も取り入れた進出を考える必要がある。

ブラジルでは国家エタノール計画の策定の後、エタノール燃料の自動車の導入が行なわれた。エタノール燃料の自動車は政府の補助等も受けて、急速に拡大したが、その後の原油価格の値下がり背景としてガソリン燃料の自動車が盛り返し、エタノール燃料の自動車のシェアが低くなっていた。ボッシュらによってエタノールとガソリンのどちらも燃料とする事ができ、かつどのような混合比率でも走行ができるフレックス燃料車が開発されると、同システムがフォルクスワーゲンに採用されて以降、各社に採用され市場に広まった。現在は市場に広く浸透している。

各州、経済効果の大きい自動車産業の誘致に力を入れており、工場建設の際には税制面での優遇措置などを受けられる可能性がある。

IV-2. 主要製品概要

① 二輪車

ブラジルは世界で有数の二輪車生産国であり、主にマナウス地域において生産が盛んである。保有台数はアジアの新興国には及ばないものの、ブラジル国内において一定規模の市場が形成されている。

図表 15-31 世界の主要国二輪車(モペット及びモーターサイクル)生産台数推移

(台)

	2006	2007	2008
オーストリア	69,045	78,269	79,176
チェコ	1,015	2,140	-
ドイツ	106,340	105,557	105,993
イタリア	702,500	692,500	641,000
オランダ	8,000	9,459	-
スペイン	268,356	253,809	-
イギリス	38,300	32,100	33,900
ロシア	25,000	25,000	-
米国	-	270,352	-
アルゼンチン	208,977	225,397	-
ブラジル	1,413,268	1,734,349	3,215,976
コロンビア	425,987	448,556	-
中国	21,934,055	25,625,526	27,501,066
インド	8,384,707	8,157,781	8,408,335
インドネシア	4,458,886	4,722,521	6,264,265
日本	1,771,386	1,676,097	1,226,839
マレーシア	432,399	446,415	536,567
パキスタン	360,561	329,395	411,715
フィリピン	308,617	350,330	317,127
韓国	146,817	131,272	133,737
台湾	1,412,953	1,509,425	1,555,042
タイ	1,334,970	1,160,967	1,227,893
その他	1,030,903	1,802,665	1,269,117
世界合計	44,843,042	49,789,882	49,711,772

(出所：日本自動車工業会および OICA 資料)

図表 15-32 世界の二輪車保有台数

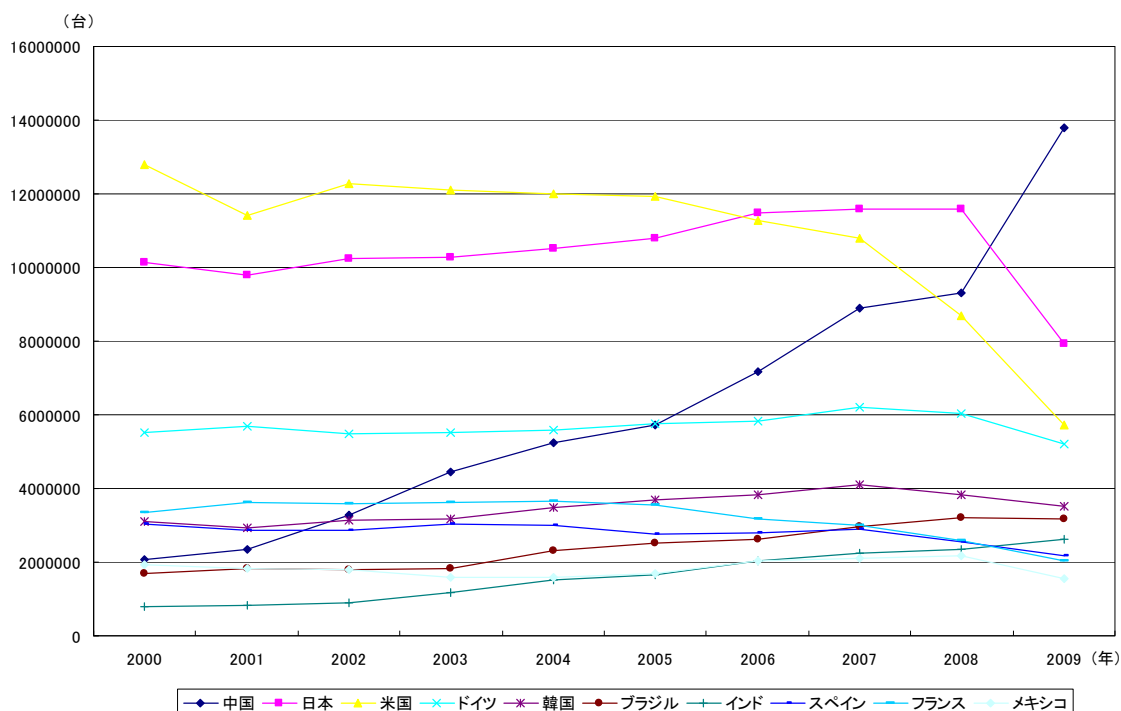
	国・地域	台数（台）
2007	イタリア	9,280,259
2007	ドイツ	5,461,608
2007	スペイン	4,774,341
2007	フランス	2,641,795
2007	イギリス	1,296,500
2007	スウェーデン	536,837
2008	オランダ	1,170,875
2008	スイス	635,700
2008	オーストリア	663,704
2008	ポーランド	1,545,000
2006	ギリシャ	740,922
2007	ロシア	4,350,000
2008	トルコ	2,181,383
2006	カナダ	484,903
2007	ブラジル	10,925,415
2007	アルゼンチン	2,028,939
2007	中国	87,096,613
2007	インドネシア	36,000,000
2008	日本	12,787,342
2007	タイ	15,961,927
2008	台湾	14,365,442
2008	マレーシア	8,487,451
2007	ベトナム	20,145,759
2007	韓国	1,785,051
2008	パキスタン	4,797,949
2008	フィリピン	2,982,511

(出所：日本自動車工業会)

② 自動車（四輪車）

ブラジルはラテンアメリカにおける主要な自動車生産国である。また国内市場自体も急速に伸びている。なお、2010年にはブラジルでの自動車販売台数がドイツを抜いて中国、米国、日本に次ぐ世界第4位となったことが話題となった。

図表 15-33 世界の主要国における四輪車生産台数推移（2009年上位10カ国）



(出所：OICA)

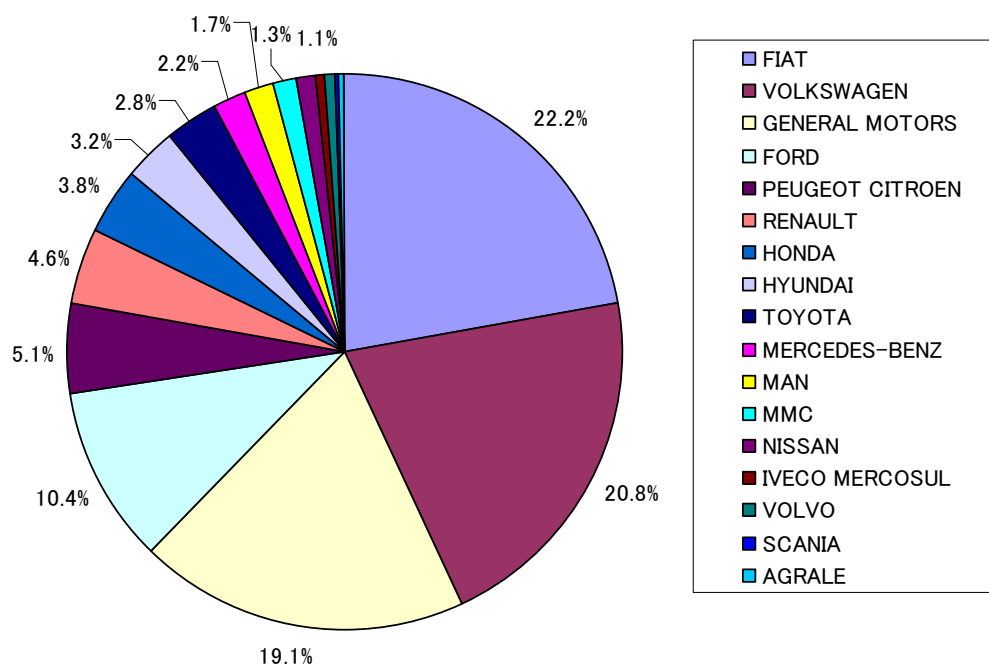
IV-3. 市場のプレイヤー概況

① ブラジル資本の企業および外資企業

ブラジルでは輸入代替工業化政策を取ったために、自国完成車メーカーは発達しなかったが、外資系企業への市場参入が行われた。欧米系を中心とする自動車メーカーが市場のシェアの上位を占めており、日系メーカーのシェアは少ない市場である。

ただし、近年の中低所得者層の購買力の上昇により、少しずつであるが車種の変化が見られる。

図表 15-34 ブラジル四輪車メーカー別国内販売シェア（2010年）



(出所：ANFAVEA：Associação Nacional dos Fabricantes de Veículos Automotores)

図表 15-35 ブラジル自動車市場主な展開企業（外資）

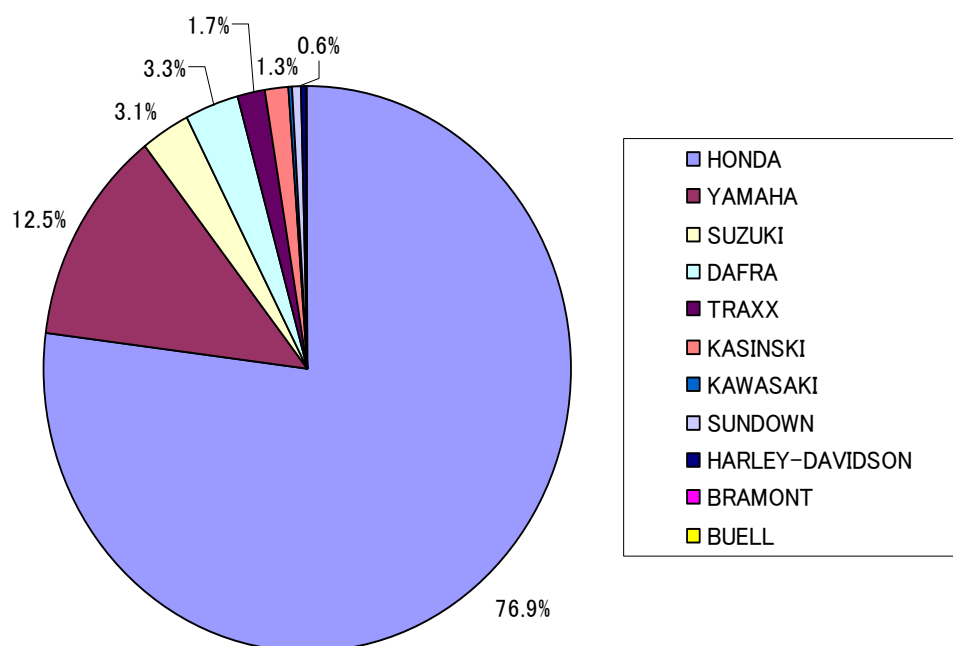
メーカー	概要
フォルクスワーゲン	<ul style="list-style-type: none"> 1950年代にブラジル市場に展開。 サンパウロ州 São Bernardo do Campo, Taubaté, São Carlos、パラナ州 São José dos Pinhais に製造拠点を有する。 従業員数 21,700 名。
フィアット	<ul style="list-style-type: none"> 1970年代にブラジル市場に展開。 ミナスジェライス州 Betim に製造拠点を有する。 従業員数 13,050 人。
ゼネラルモーターズ	<ul style="list-style-type: none"> 1920年代にブラジル市場に展開。 サンパウロ州 São Caetano do Sul および, São José dos Campos, リオ・グランデ・ド・スル州 Gravataí に製造拠点を有する。 従業員数 21,000 人。

フォード	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1919年にブラジル市場に展開。 ・ バイアーア州 Camaçari、サンパウロ州 São Bernardo do Campo 及び Taubaté、セアラ州 Horizonte に製造拠点を有する。
プジョーシトロエン	<ul style="list-style-type: none"> ・ 遅れて市場に参入したが急速に売上を拡大。 ・ リオデジャネイロ州 Porto Real に製造拠点を有する。 ・ 従業員数 4,500 名。
ルノー	<ul style="list-style-type: none"> ・ 遅れて市場に参入したが急速に売上を拡大。 ・ パラナ州 São José dos Pinhais に製造拠点を有する。 ・ 従業員数 5,000 名。
ヒュンダイ	<ul style="list-style-type: none"> ・ ゴイアス州 Anápolis に製造拠点を有する。 ・ 従業員数 1,500 名。

(出所：ANFAVEA 資料、各社 HP、「現代ブラジル辞典」等をもとに(株)日本総合研究所作成)

一方、二輪車の分野においては日本企業のプレゼンスが高く、ホンダ・ヤマハ・スズキの日系3社で、ブラジル国内のシェアの9割を占めている。

図表 15-36 ブラジル二輪車市場企業別販売台数シェア (2009年)



(出所：abraciclo)

② 日系企業の状況

ブラジルにおける日系の自動車メーカーの活動の概要は下表の通りである。

図表 15-37 ブラジル自動車市場主な展開企業（日系）

メーカー	概要
トヨタ	<ul style="list-style-type: none"> サンパウロ州 São Bernardo do Campos 及び Indaiatuba に製造拠点を有する。現在新工場の建設中である。 従業員数 3,300 名。
ホンダ	<ul style="list-style-type: none"> サンパウロ州 Sumaré に四輪車の製造拠点を有する。 従業員数 3,600 名。 2006 年より 4 輪車でフレックス車の販売を開始。 2010 年のブラジル二輪自動車市場販売のシェア 76.9%。
三菱自動車	<ul style="list-style-type: none"> ゴイアス州 Catalão に四輪車の製造拠点を有する。 従業員数 2,000 名。
日産	<ul style="list-style-type: none"> パラナ州 São José dos Pinhais に四輪車の製造拠点を有する 従業員数 950 名。
ヤマハ発動機	<ul style="list-style-type: none"> 2010 年のブラジル二輪自動車市場販売のシェア 12.5%。
スズキ	<ul style="list-style-type: none"> 2010 年のブラジル二輪自動車市場販売のシェア 3.1%。

（出所：各社 HP、abraciclo 資料、「現代ブラジル辞典」等をもとに(株)日本総合研究所作成）

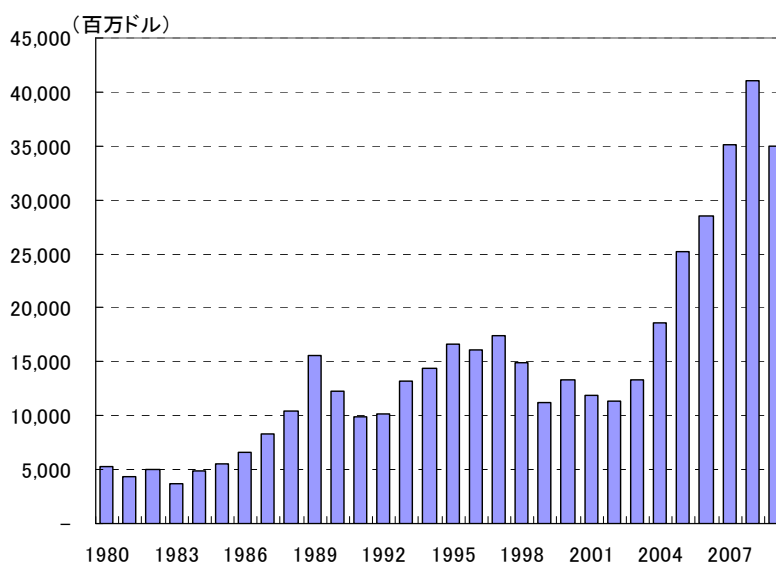
IV-4. 関連産業の状況

ブラジルにおける自動車部品産業は年間 349 億ドルの販売額を持ち、約 20 万人の雇用を生み出している（いずれも 2009 年）。2009 年は前年に比べ販売額が落ち込んだものの、長期的には順調に市場が拡大してきた。

ブラジルの部品メーカーには外資系も多い。2009 年時点で、部品販売額のうち 29%がブラジル資本のメーカー、残りの 71%が外資系メーカーである。

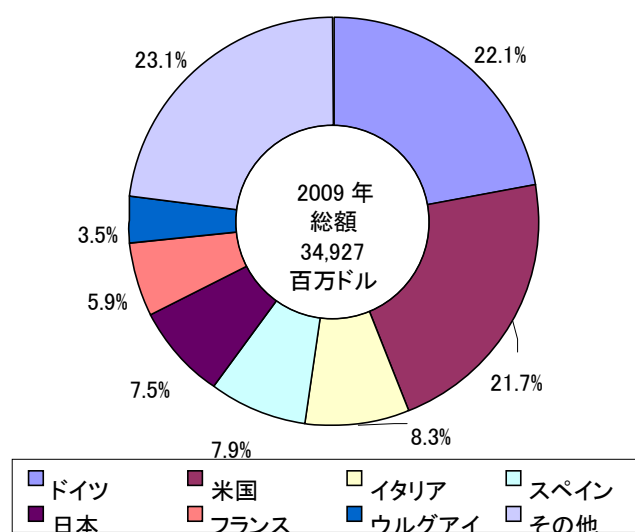
また、外資系部品メーカーの中では、ドイツと米国の企業数が多く、それぞれ 2 割以上を占める。日系の企業数は第 5 位であり、外資系メーカーの 7.5%を占める。

図表 15-38 ブラジル自動車部品販売額の推移



(出所 : Sindipeças、Abipeças)

図表 15-39 外資系の自動車部品メーカーの国籍別シェア



(出所 : Sindipeças、Abipeças)

V. 電子機器および電子部品工業

V-1. 概要

ブラジルでは、輸入代替工業化による国内産業の育成が目指したが、その後市場開放政策によって外資系メーカーがブラジル市場に参入した。それまで政策によって保護されて

きたメーカーは価格競争力や製品の技術レベルにおいて、外資系企業との競争力が劣った。特に電子部品分野では、中国等で生産された安い部品との競争に負け、国内生産は大きく後退した。

一方、耐久消費財の普及、インターネット網の整備、自動車生産の拡大など、ブラジルの電子機器・電子部品の市場の拡大基調を下支えしている。

V-2. 市場のプレイヤー概況

電子機器・電子部品分野は上述の経緯から国内企業が概して脆弱であり、外資系企業による生産が盛んである。同分野のグローバル企業は概ねブラジルに進出し、国内での生産を行っている。

一方、この分野では輸入も盛んである。ABINEEによると2010年の国内販売額が1,240億リアルである一方、輸入は349億米ドルであった。為替レートを1ドル1.7リアル程度であることを考えれば、国内需要の半分程度を輸入品が占めている計算となる。なお輸出額は76億ドルであった。これは輸入額の2割程度に過ぎない。

V-3. 主要製品概要

電子機器・電子部品のうち、主要な輸出品目は携帯電話であり、組み込み電子部品、密閉型コンプレッサ、産業機械コンポーネント等が続く。

一方輸入においては、通信機器部品と半導体が多く、コンピュータ部品がそれに続く。

図表 15-40 電子機器・電子部品の主な輸出品目（2010年見込み）

品目	輸出額（百万ドル）
携帯電話	1,058
組み込み電子部品	781
密閉型コンプレッサ	667
産業機械コンポーネント	578
モーター・発電機	540
変圧器	405
冷蔵機	211
計測機械	207
電動発電機類	181
情報用計算機	170

（出所：ABINEE）

図表 15-41 電子機器・電子部品の主な輸入品目（2010年見込み）

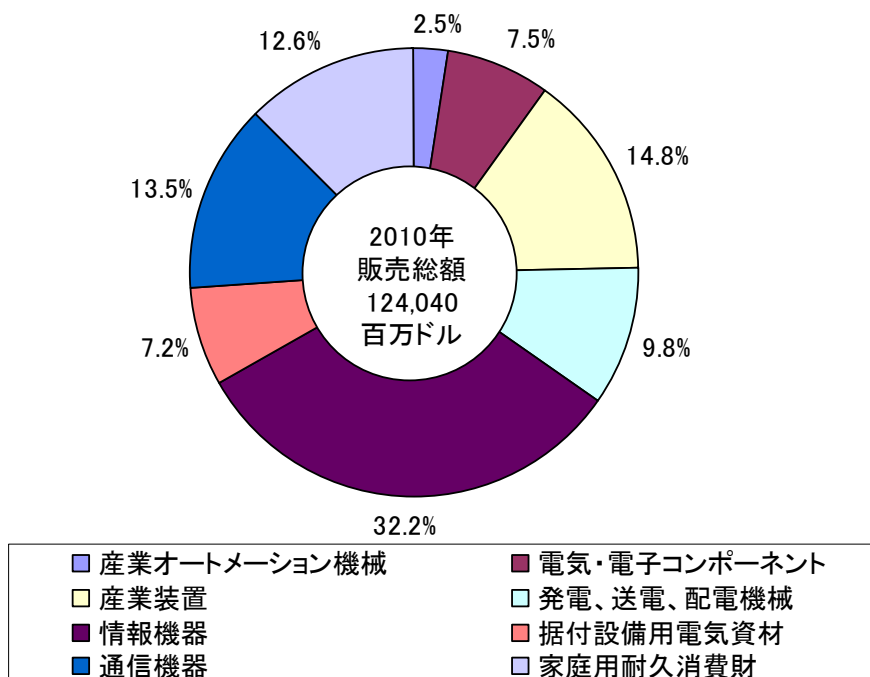
品目	輸入額（百万ドル）
通信機器部品	4,689
半導体	4,575
コンピュータ部品	3,509
組み込み電子部品	1,284
計測機械	1,271
電動発電機	1,071
産業機械用計算機	847
医療機器	796
データ処理用機械	718
受動部品	622

（出所：ABINEE）

V-4. 関連産業の状況

ブラジルの電子機器・電子部品の需要先は、情報機器向けが最も多く、全販売額のほぼ3分の1を占める。次いで産業装置、通信機器が主要な需要先である。

図表 15-42 電子機器・電子部品の主な需要先



（出所：ABINEE）